# ネブラスカ覚え書

## ――その風土と歴史――

小野　修

### はじめに

ネブラスカ州は北米大陸の中央に位置する。州中央部のカーニー市郊外のハイウエイには、東西両海岸の起点サンフランシスコおよびボストンから、そこが一七三三マイルの等距離であることを示す標識が立っている。南北について見てもこの州が中央に位置することから、第二次大戦以降戦略上の重要な拠点とされてきた。艦載機による空爆を避けうる距離に位置するということから、第二次大戦中には、ここに軍需物資の貯蔵庫（depos）やドイツ軍捕虜収容所がおかれていた。軍需物資の倉庫は、カマボコ型につくったコンクリートの建物に土盛りをしたもので、四〇メートル×二〇メートル、それらが一〇〇メートルおきに散在し、延々と何キロにもわたって並んでいる。遠望すると太平原に散開した無数の戦車群のように見える。今日ではこれらの倉庫はそのまま放置され、殆んど中は空であるか、民間に払い下げられて、養鶏場などに利用されているところもある。

しかし、北米大陸の中央部に位置する軍事上の利点は今日も変らないので、アメリカ戦略空軍司令部は州最大の都

市オマハにあり、ネブラスカの各地には大陸間弾道弾の格納用サイロが配置され、戦闘爆撃機などによる急降下爆撃の演習（実弾をつかわず、コンピューターによって、命中率の測定を行う）も展開される。

ネブラスカ州の面積は七七二二七平方マイル、東西約四〇〇マイル、南北約二〇〇マイル。これは日本と比較すると、関東・東海・中部・北陸・近畿を合わせた面積に匹敵する。その面積に居住する人口はわずか一五五万で、これはほぼ京都府の人口に等しい。一平方マイルに平均二〇人という人口の希薄さは、近年の人口の都市集中傾向のために、人口の三八・五％が散在する郡部では更に低く見積らねばならない。ハイウェイを走る車から、牧草がうすく覆うサンド・ヒルの起伏が何十マイルにわたって続くのが見られ、その間、全く人家がないという地域は、特に、この州の北西部の特徴である。

ネブラスカという名前は、オマハ・インディアンの言葉で「浅い川」という意味で、州南部を東西に貫通するプラット川を指したものである。この河には、オガララ市付近に一九四〇年に完成した貯水量二百万エーカー・フィートの人工湖マカナヘがあるが、このダムができる以前には、この河はその付近では「水深一フィートで川幅数マイル」と称せられるほど浅く広い川であった。

こうした平らな川が流れる土地は、起伏の少い平原である。州の平均勾配は、東から西へ一マイル進む毎に約九フィート上昇するといったなだらかなものである。気温は東南部より西北部に向うほど低くなる。東南部では一日の平均気温が華氏八〇度（摂氏二六・七度）の日が三ケ月あまりつづくが、西北部では二ケ月あまりである。年間雨量は東部が九〇〇ミリを越えるのにたいし、西部では三八〇ミリとその半分にも満たない。こうしたことから、ネブラスカの植生は東南部から北西部にかけて大きな違いをみせている。

ネブラスカの土地利用は大きく二つの種類にわけられる。耕地と牧草地である。ネブラスカ州を斜めに二つに分断すると、東部及び南部は耕地、西部及び北部は牧草地として利用されていると大略して言うことができる。ネブラスカ州の西部は次第に高さを増し、西部の州境に近いキンボール市では海抜一六五三メートルでありながら、なお土地は平坦で、このあたりはまだ広大な平野であって、ロッキー山脈の連なりを見るためには、隣接するワイオミング、コロラド両州に入らねばならない。ロッキー山脈は、平原の西の果てのあたりで、急に平野が終って山岳になるかたちで隆起している。これは空から見ると興味深く観察できることである。いわゆるグレイト・プレインズ（Great Plains）と称せられる半乾燥大草原地帯は、ロッキー山脈の東側にひろがり、北はカナダから南はテキサスにまでまたがるが、太古において海底にあったため、土質は砂礫ないし細かな砂であり、そのこともあって砂の丘稜地はサンド・ヒルとよばれている。西の州境に近づくにつれて長い段丘があらわれ、そのたびに、草原は数十メートル海抜が高くなり、ときおり平原の中に岩山（butte）や崖（bluff）を見ることも多くなる。

このような土地に白人の開拓者が入り、活発に耕作が行われはじめたのは、今から凡そ一〇〇年前であり、ネブラスカがアメリカの第三七番目の州となったのは一八六七年であった。現在、トーモロコシや、ライ麦の生産では全米第一、畜産を含め農業生産全米第五位のこの州も、一八五〇年頃までは、アメリカ原住民が原野を野牛を追って暮し、少数の冒険的な毛皮商人をのぞけば、白人の姿を見ることはなかった。

現在、ネブラスカの人口のうち九六・六％が白人、黒人は二・七％。州在住のインデアンは総数約六六〇〇余人（一九七〇年）、その多くはインディアン保留地にいて、町中で彼らの姿を見ることは、黒人と同様、稀である。

一八六〇年の州人口はわずか三万人。今日までの一〇〇年あまりのあいだに人口は五〇倍、そして、六三万エーカ

ーの耕地面積は七〇倍に拡大した。このような急激な人口の流入と農地の拡大が、きわめて短期間にこれほどの規模で起ったということは注目に価するだろう。これはきわめてアメリカ的な現象だったのである。

## 一　風土

アメリカ合衆国第三代大統領ジェファソンがナポレオンのフランスからルイジアナを買収したのは一八〇三年、当時の金にして一五〇〇万ドル、一エーカーあたり四セントであった。ミシシッピー河の西流域全体をふくむこの土地は、アラスカを除いた合衆国の現在の領土のほぼ四分の一はある。しかし、この新領土はその当時は勿論、半世紀以上たったのちも、探検家たちの不充分な調査のため、大部分が砂漠だとされていた。

一八二〇年、ロッキー山脈への遠征から帰った陸軍工兵少佐S・H・ロングは、ミズーリ河からロッキー山脈に至る地域は、その殆んどが広大な荒野で、この広い土地のすべては全く耕作に不向きであり、農業人口を養うことは無理であると報告した。彼によれば、ここの土地は遊牧と狩猟によって暮しをたてている原住民、野牛とジャッカルの放浪するがままにしておくのがよかろうということであった。

この報告は現在から見れば不充分であったとしても、決して観察が不正確だったとは言えない。ロング少佐が見た通りのネブラスカの風景は、今も州の北部や西部の至るところで見ることができる。全く樹木のない大草原の果てしないひろがり、川は干上っており、土は乾き切って固く、その上に貼りついたように茂っている馬のたてがみのような草が強風にあおられている。現にこうした性質の土地は、放牧以外に食糧を生産できない荒野として今も残されて

いる。勿論、かつての荒野の半分は耕地に変貌した。これは後にのべるように潅漑事業の成果なのであるが、荒野を耕地にどこまで変えうるかは、潅漑のための投資効果の大きさ次第なのである。

合衆国の独立達成後、アパラチヤ山脈を越えて西部へ自分たちの土地を求めて移動する人々の奔流は半世紀あまりのあいだに、ミシシッピー河東流域にひろがった。「アパラチア山脈の西には、一七七〇年には五〇〇〇人の人間がいたが、一八四〇年には八〇〇万人になった」*とヒューバーマンは書いている。しかし、この圧倒的な移住者の流れも、一八四〇年頃に、ミシシッピー河の支流であるミズーリ河の近辺まで拡ってそこでとどまった。彼らの行手には広大な半乾燥地の平原がひろがっており、ここはそれまでの水と森林のある豊かな土地とは全く異り、果てしない土地はあっても、水と樹木がなく、その上に、草原を疾駆するインディアンにおそわれる危険が大きくそれが人々を躊躇させた。しかも西経九十五度以西の土地は当時インディアンの保留地に指定され、白人の入植は禁じられていた。

＊ レオ・ヒューバーマン『アメリカ人民の歴史』上、小林良正・雪山慶正訳、岩波新書、一三九―四〇頁。

移住者の群れがミズーリ河をこえるころから、ネブラスカ州の歴史がはじまる。人々は井戸を掘って水を求め樹木のないところに家を建てる工夫からはじめなければならなかった。彼らは草の生えた地面をシャヴェルで方形に切りとって、それを煉瓦のように積み上げて小屋の壁を築いた。これは sodhouse とよばれ、現在ではミンデンの「開拓者村」などに展示してあるものを除けば殆んど残っていないが、土と草の根がからみあった素材で、数年の使用に耐える強さと、夏涼しく、冬暖い快適さをそなえていたものと思われる。これはその地方のインディアンの暮しの知恵に学んだものであった。

ネブラスカは今日でも森林資源に乏しい。いづれの町も、亭亭と繁る街路樹に覆われ、町全体は遠望すれば草原に

浮ぶ島のように見えるが、これはすべてが植林による成果である。開拓期の写真をみると、一八五〇年代のオマハでさえ、ミズーリ河に接しながらほとんど樹木らしいものが写っていない。現在、植林はネブラスカ州民にとっての大事業の一つである。灌漑路に沿って、あるいは農業、牧場に沿って、ポプラやコトン・ウッド（州樹）、トネリコ、ニレ、その他の大型の樹木が防風林の役を果している。樹木はある一定以上の大きさに育ったあとは灌水の必要がない。雨量は少いが、地下水が豊かなためである。畑の中の一軒家が防風林に囲まれている風景はわが国の山陰地方を思い出させるが、ここではその木立ちの中に往々にして風車が立っている。風車は今日では放牧地で牛の水呑場に地下水を汲み上げるために利用されているにとどまり、家庭用水は電力で汲み上げているが、かつて風車はこの地方になくてはならないものであった。夕焼け空を背景に立つ風車のシルエットはネブラスカ特有の風物詩である。ネブラスカの平原を吹きわたる風は強く、台風の余波を思わせる吹き方で、しかも休みなく数日にわたって、ときには一週間も吹き続けることがある。

州の中西部のノースプラット市近郊の牧草地で風害による巨大な砂の窪地をみたことがある。土地の人の話では一〇年前、車のわだちで草が数米にわたってはがれたあと、強風が砂を吹きとばしつづけ、修復の努力も空しく、現在では深さ五メートル、直経三〇メートルの穴となり、年々ひろがる一方だという。これは blow out とよばれる現象である。砂は砂時計に用いうるサラサラした細かさで、VND——Valentine—Nueces Dune Sand——と名付けられ、ネブラスカ州の北部、中西部の大半を占める砂丘地帯に広く分布している種類である。この砂は含有物の性質から良質の牧草が育つが、地表を犂で破ると砂が風で飛び惨澹たる結果を生ずるとされている。このことは、この土壌で耕作をすることの困難さを想起させる。ネブラスカの農民にとって、耕地の表土が強風で吹きとばされないように

する注意は不可欠である。VNDのような細かい砂でなくとも、この地域の殆んどの土壌はダスト・ボウルをつくりやすい性質（たとえば粘土質）を有している。防風林をつくる以前に、彼らは作付地と休閑地（麦は土地の荒廃化を防ぐ目的から隔年毎に作付けする）を短冊型、もしくは、まがりくねった帯状に並列させて、風で表土がとばされない努力を忘れない。麦、トーモロコシ、アルファルファ（むらさきうまごやし）、ソーガム（飼料用モロコシ類）などが生育しつつある広大な農地の上空を小型機で飛ぶと、自然と人工とが織りなす絶妙な美しさをもった幾何学模様が展望できる。アルファルファを時速五マイルのスピードで刈ってゆく巨大な収穫機械が、テントウ虫が這うように見える。この牧草は刈りとられたあと、一部は工場に運ばれ暗緑色の錠剤型飼料にかわる。家畜の冬季用の飼料である。

再び水の問題にもどるが、風車で井戸水を汲み上げるとしても、その水量は人畜の飲用と生活用水として利用できる以上のものではない。灌漑に用いることもあったが、広大な土地をうるおすには不充分であった。灌漑用水の確保は、第一がダム、つまり人工湖の建設、第二は地下水の動力ポンプによる大量の汲み上げによらなければならなかった。従って、この二つともが近代的技術の発展、つまり、巨大なダムや長い灌漑用水路の建設をはじめとし、深い井戸掘削に至る土木工事技術の発達、ならびに電力モーターもしくはガソリン・エンジンによる地下水の汲み上げ機械の登場を待たねばならなかった。この両者が機能しはじめると、ネブラスカの耕地は一層拡大するとともに、単位面積あたりの収穫高が飛躍的に上昇することになったのであるが、それは殆んど、ここ数十年間に可能となったことである。

この草原地帯での気候の苛烈さをあらわすものに、竜巻がある。筆者も地平線上にひろがる黒雲から、不気味な尾のように垂れ下った竜巻きを見たことがある。中南部のインペリアルという町を訪れた際、数十米のサイロが中央部

からくの字に折れ曲っているのを見た。これは竜巻きのエネルギーの大きさを物語っている。六月のはじめ、ホールドリッジ市でゴルフボール大の雹が十分間にわたって降りそそぎ、作物に被害をもたらし、家々の屋根や自動車に損傷を加えた。街路樹の折れた枝が道路を覆い、市の清掃車が繰り出された。

現在ネブラスカ中央部を旅行する人が車窓から目撃するこの半乾燥地帯特有の灌漑方式は「ピヴァット」とこの地方で呼ばれているものである。これは井戸を中心にして長さ五〇〇メートルにも及ぶパイプを半径に、地上約五メートルの高さを保ちながら、ゆっくりと円を描きながら灌水してゆくやり方である。パイプにはA字型の脚がついており、脚にはタイヤと一馬力のモーターがついている。脚と脚の間隔は約四〇メートル、パイプの接合点は適度の折れを考えてあるため、数メートル程度のゆるやかな起伏地を越えることができる。水はパイプにとりつけた散水栓からシャワーのように放射しながら約二〇メートル四方を灌水している。この巨大なアームはその先端では時速一ないし二キロほどのゆっくりした速度で移動している。灌漑の対象はトーモロコシとアルファルファである。この「ピヴァット」center-pivot 方式は灌漑水路のない地域で用いられている。この方式では電力が必要なので、辺地では農家が共同で重油による発電小屋を運営しているところもある。こうした灌漑設備は建設と維持に費用がかさむため、投資分を上廻る収穫が見込まれる地域で行われている。初夏、上空から見ると、こうした農地が数多の緑の円型模様を平原の上にひろげているのがわかる。

灌漑水路から分水してトーモロコシ畑に最終的に水を引く場合、日本の水田のように畔に取入口を設けず、あらかじめ「へ」の字型に曲げて成型した約二吋径のビニール・パイプをサイフオン式に用いているのが通例である。そのほかの方法としては、水路のかわりに五吋径、長さ一〇メートルばかりのアルミ管を用いることもある。これは指を

かけて持ち上げることのできる軽さにつくられ、二メートル毎に開閉できる排水口があけてある。

ネブラスカの地下水源は殆んど無尽蔵とも言われているが、中西部で地下水源が汲み上げによって低下しはじめているところもある。

開拓初期に比べると、その後の降水量は多少増加を示し、収穫量を高めたと言われるが、耕地が拡がるにつれ、かつては固い地表を川に向けて流れ去った雨水が、開墾された柔らかな土壌に吸収されるようになったため、作柄が次第に好転したためとみることができる。

潅漑のための投資が収益に見合わない西部及び中央北部は牧畜用地とされる。この地域は一本の立木も見ることもない渺渺たる草原である。人間の食用としうるものは、その草を消化できる草食獣のみである。牛肉を主食とする習慣の名残りが、この地方の人々の食生活にみられるのは、この風土によると思われる。

一八六五年ごろまでは、この平原には数百万頭のアメリカ野牛が棲息し、アメリカ原住民はそれを糧として暮していた。しかし、移住者が入り込み、毛皮の採取と、改良種の食肉牛の放牧地確保のために組織的な狩猟が行われた結果、七〇年代には殆んど絶滅寸前に至った。インディアンが平原を追われてゆく過程と野牛の駆逐とは軌を一にしている。ネブラスカのインディアンの悲惨な運命については、ここでは触れる余裕がない。筆者はレッド・クラウド族の少年の詩をここに引用し、彼らについては稿をあらためて書くことにしようと思う。

Where are my people?
Where did they go?

Will they come back?
Why did they leave me?
Their teepees are gone.
Thir fires are out.
The plains are empty.
Where are my people?

Tom Tobacco*

*トム・トバコ君はサウス・ダコダ州のインディアン保留地パイン・リッジにあるレッド・クラウド・インディアン高校の生徒。この詩は、生徒会の文集 "Voices of Red Cloud" Spring. 1978 に掲載されたものである。

## 二　辺境の時代

ジェファソン大統領は、二大洋にまたがるアメリカ合衆国の成立の夢を抱き、ミシシッピー以西の地域の探索に強い関心を寄せていた。彼はルイジアナ買収の前年、自分の私設秘書であった陸軍少佐メリウェザー・ルイス（二八才）にミズーリ河を溯行して、山岳地帯を越え、太平洋へ出る河ぞいの道を調べ、インデアンとの友好的な毛皮取引きが進展するルートを見出すよう命じた。少佐はG・R・クラーク少尉と共に調査に赴いた。ルイスは一八〇四年のルイジアナの正式移譲に立ち合い、同年五月に一行四五名で出発、翌年コロンビア河を下って一月に太平洋岸に達し

ている。この頃から冒険的な毛皮商人が海路あるいは陸路でオレゴンを目指してゆくようになる。J・J・アスターは一八一一年コロンビア河口にアメリカ毛皮会社の西部拠点「アストリア」をつくって活発な毛皮貿易をはじめている。オレゴンは当時スペインの領土であったが、人口希薄でスペインの植民も殆んど行われておらず、米、英、ソが狙いをつけていた。一八一二年の対英戦争の機運も働いて、アメリカは共同統治国のイギリスの勢力を駆逐してオレゴンを獲得することに一層の積極性を示し、ミズーリ河経由でのオレゴンへの道の開拓に陸軍の勢力が投入され、ミズーリ河畔に前進基地としてカウンシル・ブラツフ、そして、対岸のネブラスカ側にアトキンソン砦などがつくられた。現在のオマハの周辺に位置するこれらの基地はミズーリ河を通行する毛皮商人の交易の安全をインディアンの襲撃から護ることにその目的のひとつがあった。一八二二年はミズーリ河で水上勤務にあたる人の数は千名を越えていた。しかし、一八二三年、モンタナのイエローストーンでミズーリ毛皮商会の一行がインディアンに襲われるなど、遠隔地にまで警備がまわりかね、やがて、アトキンソン砦も存在理由を失って一八二七年には放棄された。

ネブラスカ州南部を西から東に流れるプラット河が注目されはじめるのはこの時期である。プラット河はミズーリ河のオマハの近くに流れ込んでいるので、これを西に溯行し、ワイオミングのスウィートウォーター河に沿って更に西に向い、ロッキー山脈を越えたのち、アイダホのスネイク河に沿って下降すればミズーリ河コースより短い距離でオレゴンに出ることができた。しかし、このプラット河は水深が浅く、船による溯行が不可能なため、川沿いに陸路を行かねばならなかった。

プラット河沿いのオレゴンへの道（オレゴン・トレイル）は毛皮商人ロバート・スチュアートによって一八一二年から一三年にかけて踏破された。彼の報告から荷車での通行が全く不可能でないとわかると、一八二四年以降、度々

の失敗を重ねながら牛車による踏破が試みられ、次第にその距離をのばしていった。一八三四年にはワイオミングにアメリカ毛皮商会のララミー砦（一八四九年に陸軍が買収）ができ、遂に一八三八年にW・H・グレイ師一行が二輪の牛車を駆って全行程を貫徹した。いわゆる「オレゴン熱」はミシシッピ河以東の人々の夢をかり立て、一八四一年を境に、集団で移住を目指す人々がプラット河沿いにオレゴンを目指すようになった。移住者の群はミズーリ河畔のインデペンデンス（現在のカンサス・シティ近郊）に集結し、幌馬車隊を組んで、リトル・ブルー河沿いに北上し、プラット河に向うオレゴン・トレイルを西に向った。

一八四三年以降、毎年千人以上の移住者がオレゴン・トレイルを辿って西に向った。一八四八年、モルモン教徒の大移住のためこの数が突如としてふくれ上る。モルモン教徒は創始者であり予言者であったジョセフ・スミスに導かれて彼らの聖地を求めながら、オハイオ・ミズーリ・イリノイと迫害を受けては移住を繰り返していたが、スミスが暗殺されると、その後を継いだブリガム・ヤングの指導のもとにミズーリ河の以西に聖地を求めた。一八四七年にオマハの近郊で試錬の冬を過したのち、ヤングの指揮のもとに、まず一四三名の先鋒隊がオレゴン・トレイルを西に向い、七月末に中間地点を南下したあたりにソルト・レーク（ユタ州）を発見し、この湖畔を新しいエルサレムとした。その後、何千もの信徒の流れがソルト・レークを目指した。彼らの多くは幌馬車を買う余力のない貧しさから、全行程を手押し車を引きながら徒歩で歩き通した。

一八四八年、カルフォルニアで金が発見されると、たちまちオレゴン・トレイルは東部からの人であふれた。一八四九年の一年間にカルフォルニアの人口は六千から十万にふくれ上った。その移住者の過半数はオレゴン・トレイルを経由した。この道を辿った「四十九年組（フォーティ・ナイナーズ）」は四万を数え、五〇年には、ララミー砦で登録された移住者の数は五万

五千を越えた。

ネブラスカの平原を進む幌馬車や人々の流れは、目の届くかぎり、曲りくねって地平線の彼方まで切れ目なく続いていた。インデアンの襲撃は未だ組織的なものではなかった。彼らはこの土地をただ通過してゆくだけの人々の群に生活を脅かされることもなかったので、物乞いをしたり、牛馬を盗む程度に止った。一八四八年にはプラット河が最も南に曲るあたりに陸軍はカーニー砦を築いた。（カーニーは現在人口約二万、ネブラスカ中南部の要衝であり、砦は復元されて、野外博物館となっている）

その目的地がオレゴン（一八四六年割譲、四八年準州）であれ、カルフォルニア（一八四八年割譲、五〇年連邦加盟）であれ、ユタ（一八五〇年準州）であれ、移住者たちはネブラスカのプラット河沿いの道を通過して行った。ネブラスカは東から西へ抜ける大陸横断の回廊であった。しかし、この不毛と思われて、ただ見て過ぎるだけの広漠たる「アメリカ大砂漠」があらためて入植可能の土地として移住者の関心を惹きつけるのは、それから間もないころであった。

## 三　開拓のはじまり

ネブラスカが大陸横断の移住者の最大の通路として注目されると、ここに大陸横断鉄道を敷設しようとする動きがはじまるのは当然であった。一八三〇年にボルティモアーオハイオ鉄道が開通して以来、鉄道の有用性と収益性が東部沿岸で立証されると、その将来性は多くの投機家の関心を惹きつけることになった。

一八四五年、ニューヨークの実業家で中国貿易に関心をもつA・ウィットニーは、五大湖地方とオレゴンを結ぶ大

陸横断鉄道の敷設の要望書を連邦議会に送ったが、当時はまだ実現不可能の空想的事業とみなされた。その前年、早くも、別のルートの大陸横断鉄道の実現のための最初の布石が「ネブラスカ準州設置案」としてイリノイ州選出下院議員スティーヴン・A・ダグラスによって提出されている。これは廃案となったが、ダグラスは次の会期にも類似の案を提出している。彼はネブラスカ・ルート（中央路線）の実現を見込んで、その通過予定地に投資していたが、そのルートが実現すればイリノイ州自体にも確実に利益になることが予測されたので、彼はどの政治的課題よりもこの実現のために尽力を惜しまなかった。歴史の皮肉は、ダグラスのこの努力によって、ネブラスカ・ルートは実現したが、ダグラスは得られたかもしれない大統領のポストをリンカンに奪われてしまった。というより、正しくは、ダグラスが持ち出した「カンサス＝ネブラスカ法」は一八四九年以来、国会議員をやめてスプリングフィールドにもどって地方弁護士をつとめていたリンカンを政治にひきもどし、リンカン＝ダグラス論争を通じその名声をイリノイ州以外にまでひろげ、遂に大統領のポストにつかせる機会を与えたのであった。

## 四　準州の時代

一八五三年、連邦議会は陸軍省の監督のもとに大陸横断鉄道の四つの路線の調査を認可したが、奇妙なことに、その中にはネブラスカ経由の中央路線は含まれていなかった。四つの路線とは、(1)ウィットニー案の北方路線、(2)カンサス経由中央路線、(3)オクラホマ経由路線、(4)テキサス経由南方路線であったが、調査の結果、どのルートも可能性なしと言えずとされた。当時監督の任にあたった陸軍長官ジェファソン・デーヴィス（後に、南北戦争当時、南部同盟の

大統領となる）は、第四の南方路線の実現に積極的で、このルートがメキシコ領を通過せざるを得ないとわかると、ピアース大統領を説得してその土地を購入させている（ガズデン購入）。路線選定がふり出しにもどったにせよ、南部路線は最も実現可能性が大きかった。南部路線はその通過地域がすべて既成の州ないし準州である上に、ロッキー山脈を越えずに迂回できる点も有利であった。しかも、北部に比して開発が遅れ、一八五〇年における南部奴隷諸州が北部自由諸州にたいしてなした譲歩（カルフォルニアを自由州として認め、コロンビア特別区の奴隷売買の廃止）の埋め合わせとして、南部路線が選ばれ、北部と南部の分裂を避けるための政治的妥協の産物とされる可能性もあった。

ダグラスは一八四七年にイリノイ選出の上院議員となり、「準州関係委員会（コミティー・オン・テリトリーズ）」の委員をつとめていた。ネブラスカが未だに準州として認められていないことが、ネブラスカ経由中央路線の実現可能性を阻んでいた。しかし、ネブラスカを準州として組織すること自体が、当時の奴隷制度の是非をめぐる南北諸州の対立の機運の中では非常に困難であった。一八四九年の時点で、自由州と奴隷州の数は共に一五州であった。一八二〇年のミズーリ協定以降、自由州と奴隷州の数は均衡を保ちつつ増大する方向を辿ってきた。ミズーリ協定は、ミズーリ州を除く北緯三六度三〇分以北での奴隷制度の採用を禁じていた。一八五〇年にカルフォルニアを自由州とするとりきめは、同州が三六・五度以南を含む点において協定に違反していた。この譲歩の見返りとして、ニュー・メキシコとユタを準州にする条件に、両州が将来独自の判断で、自由州と奴隷州のどちらを選ぶかの去就を決することに委されたのであった。ユタ州は基準境界緯度以北であったから、これもミズーリ協定に違反していた。このような妥協が行われたのは無論、連邦の南北分裂を避けるためであった。

ネブラスカ準州の設立案は、南部選出の議員から新たな自由州を増やす結果を招くとして警戒され、一八五三年の

二月の「準州関係委」提出案は、ダグラス議員の努力にもかかわらず上院で否決された。同年末の第三三議会に提出されたかわりばえのしない案は、翌年一月ダグラス委員長のもとで、大幅に修正された。当初の案の地域を南北二州、即ち、カンサス、ネブラスカ両準州にわけ、将来、州成立のさいの奴隷制の採否は両準州の住民の意向にまかせ、一八二〇年のミズーリ協定は適用されない、とした。この案は、賛否拮抗する採決ののち、五月、議会を通過した。「カンサス＝ネブラスカ法」がそれである。これは南北の勢力の角逐が生み出した妥協の産物であった。ミズーリ州が奴隷州であっただけに、南部議員は、西に隣接したカンサスが奴隷州となることを期待したのであった。――しかし、奴隷制度の根源でもあった綿作は、降雨量の少いカンサスでは多分不可能であった。この「カンサス＝ネブラスカ法」成立後に、カンサスで起った狂信的奴隷廃止主義者ジョン・ブラウンとその一族郎党による奴隷所有者の殺害事件は、南北戦争勃発の火種ともなった。この「カ＝ネ法」によって政治の世界にひきもどされたリンカンがダグラスと交した奴隷制度にまつわる論争について触れることはこの小論の範囲を越えることになる。ダグラスがネブラスカの準州の当初の領域を二分した理由は、彼が念願とした大陸横断鉄道建設のため、ネブラスカを準州へ組織することを何よりも優先させようとし、妥協すべきを妥協し、法案成立に懸命であったことを示している。しかも、奴隷制の採否を住民の意志に委ねたことは巧みな策略であった。何故なら、ネブラスカ、カンサス両地方にはまだ住民は数えるばかりであり、民主主義の大義名分によりその意志決定を将来にのばすことで、準州成立それ自体の実を手にすることができた。一八五四年のネブラスカ準州は後のノース・ダコタ、サウス・ダコタ、モンタナ、ワィオミング、コロラド諸州にまたがり、その面積は州成立時の約五倍であった。同年一一月調査によると準州の移住者の人口は二七三二名であった。（無論これにはインディアンは含まれてはいない。インディアンについては別に述べることとする。）

人口はその殆んどがミズーリ河沿岸に散在していたが、二年後には一万人を越え、一八六〇年には三万人、六七年には五万人に達する急増を見せ、人口分布も州成立段階ではプラット河沿いに西一〇〇マイルにまで拡がることになる。

ネブラスカ準州の行政の中心は当時まだ家が二〇軒しかない寒村オマハに定められ、ここで最初の準州議会が開かれた。オマハは対岸がアイオワの重要港カウンシル・ブラッフでありプラット河の河口にも近かったからである。上下両院の代議員の大多数はネブラスカ在住者ではなかった。民法・刑法など準州の法制度は、そこからの出身者が多いという理由から隣りのアイオワ州のものがそのまま持ち込まれた。

## 五　移住者と土地

インデアンのための土地としての留保条件が準州成立という形でとりはらわれてしまうと、たちまち土地を求める移住者が流入しはじめ、土地の買占めを狙う投機業者もそれを追うようになる。

その当時まで、土地を手に入れるためは、一八四一年の「土地先買法（プリ・エンプション・ロー）」にあるように、(1)公有地が売出されたとき、一移住者あたり、一六〇エーカーを一エーカーあたり一ドル二五セントで買うか、(2)退役軍人土地助成認可を受けるか、(3)競売に付された土地を買うかのいずれかであった。しかし、流入する移住者はこれを待っていては土地を手に入れる可能性が少いので、気に入った土地が見つかると無認可で居坐るスクオッターとなることが殆んどであった。そのため、一八五四年、連邦議会は、スクオッターのそれぞれの土地の一六〇エーカーは準州の土地調査終了後ただちにその本人が先買権をもつとする決定をなした。しかし、一八五六年の段階で、調査済みの土地は約二四〇

万エーカーとなったが、すでに準州に移住した人の数は一万を越え、各戸主は自己の土地に境界を設けその所有権を主張していた。一八五九年、ネブラスカの土地が一斉に売りに出されると、忽ち土地投機業者が軍人やその未亡人から土地の権利を安く手に入れるなどして、買い占めを働き、移住者は金融業者から法外な利子を支払って借金をして自分の土地を買った。彼らの中には利子の支払いのために折角得た土地を手離すものも珍らしくなかった。一八六二年、「自作農場法（ホームステッド・アクト）」がリンカン大統領によって署名されるに至るのも、そのような背景があったからである。

「自作農場法」によって、二一才以上のアメリカ国籍をもつ善良なる市民で、未占有公有地である四分の一平方マイル（一六〇エーカー）を一〇ドルをそえて登録した直後より当該地に五年以上居住したものにはその所有権が与えられることとなった。一八四一年の土地先買権法は、自作農場法が五年間居住したものには無料で土地を提供したのに対し、更にそれ以上に土地を求める場合に限って適用されるというかたちで効力を保ちつづけた。

土地を求める真面目な農民には公平に土地を分与するという精神に立脚したこの「自作農場法」も、その公平分与の目的を充分に達することができなかった。H・N・スミスによれば、次のようなかたちで「ほとんど完全に失敗した」のであった。

「自作農場法は多数農民によるみずから所有し、みずから耕す農地への入植をもたらさなかった。鉄道への厖大な土地分与や、国有地買入れを認めることによって投機師の都合に奉仕していた既存諸法規を廃棄し損ねたことや、そして自作農場法の冷笑まじりのくぐり抜けが、公有地政策の現実の作用を決定した。自作農場法通過の一八六二年から一八九〇年までの間に、わずか三七二、六五九の登記が行なわれただけであった。せいぜいのところ、実際の入植者の家族を含んで（全国で）二百万人がこの法の働きから利益を受けた程度であろう。だが、

その間に、国民全体の数は三千二百万増加し、自作農場創設の大半が行われた西部諸州では一千万以上増加しているのである。例えば鉄道だけで、自作農場法によるよりもっと大量の土地を、エーカー当り五ドルの平均価格で売っているのだ。機械化革命が蒸気推進のトラクターと脱穀機を北西部の小麦地帯に導入したとき、小規模で自由保有の自給農場はその型そのものが抹殺される危険に瀕した。この変化のもっとも雄弁な指標は小作の比率である。記録が手に入る最初の年である一八八〇年、ネブラスカの農場の一八パーセントが小作農によって経営されていたが、一八九〇年にはこの数字は二四パーセントに上昇した。一九〇〇年までに全アメリカ農民中三五パーセント以上が小作となり、比率は急速に増大しつつあった。法的には自耕とされている多くの農場が何重もの抵当に入れられていて、外見上の所有者はほとんど自分自身の主人ではなかった。」

（H・N・スミス『ヴァージンランド』永原誠訳、研究社、一九七一年、二三五―三六頁）

このような事態が生ずる根源的理由は何であっただろうか。移住者が開拓をはじめるにあたっての必要三条件、即ち、土地、投下資本、技術が、悉く当時の入植者たちにとっての難関であった。自作用の土地を入手することそれ自体が既に述べたように問題であったが、やっと手に入れた土地が豊沃でない場合も多く、そうなると一六〇エーカーで一家を支えることは不可能であった。その上、土地を入手しても、そこから年々の収穫が上るまでの投資と生計費は金融業者から高利で借りなければならず、他方、入植者が必要とした農業技術は灌漑を必要とする半乾燥地帯向きのものであるのに、入植者たちの出身地であるミズーリ河以東あるいは欧州（特にドイツ、スカンジナヴィア方面）の豊富な水と森林資源に恵まれた地方での農業技術はここでは役に立たなかった。こうしたことが原因で、一八六三年から一八九五年までにネブラスカに入植した登録件数一三一、五六一　のうち最終的に所有権が与えられたものは半数の

六八、八六二、登録面積、一八、三九三、五四一エーカーのうちの半分、九、六〇九、九二二エーカーにすぎなかった。こうして手にした土地が、その後大土地所有者の手に次第に集中してゆくことは、さきに引用したスミスの述べる通りである。

## 六　大陸横断鉄道

交通ならびに通信手段の技術的な著しい進展の時代がネブラスカ地方の開発の時期と重なり合った。蒸気船、鉄道、電信などの次々の登場は、開発の規模を拡げ、その速度を高めた。

蒸気船がミズーリ河のプラット河河口に姿を見せたのは一八一九年であり、一八三一年頃からは定期便がオマハの対岸のカウンシル・ブラッフまで上下していた。はじめは船荷の大半が毛皮であったが、四〇年代にオレゴン熱に魅せられた人々やモルモン教徒の移住、更に四九年のカルフォルニアのゴールド・ラッシュとネブラスカに渡る人の数が増大すると船の交通は乗客、貨物を含め急激に繁くなり、五四年の準州成立、五八年のコロラドのゴールド・ラッシュに至って最盛期を迎える。その年は八月までに一二八隻の蒸気船が、オマハ‖カウンシル・ブラッフに到着している。船の最大のものは船幅四〇フィート、長さ二五〇フィート、三〇〇ないし五〇〇名の乗客のほかに五〇〇から七〇〇トンの貨物を塔載することができた。しかし、一八六〇年代以降、海運は急激に衰退しはじめる。その原因は南北戦争による交易の杜絶であり、今一つは一八五九年には東部からミズーリ河畔セント・ジョセフにまで達する勢いを示す鉄道との競争に破れたためであった。

カルフォルニアやオレゴンのように太平洋に面した地域は船による貨物の輸送ができたが、コロラド、ユタ、モンタナ方面への輸送はすべてプラット河沿いに幌馬車（ワゴン）に頼らなければならなかった。これらワゴンは鉄道ができたのちも地域運送に利用され、それはトラックにとってかわられるまで活躍した。

郵便はカルフォルニア、オレゴン地方は開拓当初より船便で運ばれたがパナマ運河も開通していない時期で日数がかかり、一八五〇年代には陸路の郵送を切望する声が高まった。一八五〇年には、US郵便がミズーリ河畔のインデペンデンス―ソルトレーク・シティ―サクラメント間に月一回の割合ではじめられたが、費用がかさみ、一時は各週毎となったが、一八五九年には半月に一度と減らされた。この年、民間業者による急行便がオマハとカーニー間を結び翌年にはデンバーまで延長された。

この時代の郵便事業を彩るエピソードをもたらしたのは一八六〇年四月にはじまった「ポニー・エクスプレス」である。これは軽量の熱練した騎手が駅伝で早馬を飛ばす方式で、ミズーリ沿岸のセント・ジョセフとカルフォルニアのサクラメント間（約三千キロ）を一〇日間で走った。これは大陸横断の電信事業が進められている時期であったので、電信距離が延びるにつれ、通信所間を走る距離は次第に短縮されていった。一八六〇年一一月、リンカンが大統領選に勝ったニュースは八日間で太平洋岸に達したが、そのうち六日はポニー・イクスプレスが駆けたのであった。この急行便は大陸横断電信がソルトレークで結ばれた翌六一年一〇月に廃止されたが、それまで、天候の厳しい冬期も休みなく続けられ、大陸横断鉄道の中央路線候補ルートの存在を天下に広める充分な成果を収めた。六二年七月一日、連邦議会はユニオン・パシフィック鉄道会社にオマハからオグデン（ユタ州）に至る路線の建設認可を与えた。しかし、莫大な建設資金を収用した土地の売り渡し代金に求めたことと、南北戦争のために一八六四年頃まで着工が

遅れた。戦後、充分な資金を得て着工され、一八六六年の暮にはネブラスカ中央部のノース・プラットまで建設が進み、六七年にはオマハとシカゴ間が開通したので、六八年、太平洋側から建設を進めてきたセントラル・パシフィック鉄道とオグデンで結ばれると、大陸横断の中央路線が完成した。

自作農場法（ホームステッド・アクト）によって移住者が自らの土地を無償で獲得する保障が与えられたとは言え、彼らが見出す土地は背後地でしかなかった。ユニオン・パシフィック鉄道をはじめとする鉄道会社はネブラスカの地所の一六・六％を連邦ならびに州政府から与えられており、鉄道沿線の両側に二〇マイル幅で土地を所有するか、鉄道を一マイル延長する毎に一二区画（一区画は六四〇エーカー）を獲得していた。このような状況のところで農場の立地は資金のない者には全く不利であった。

「資金のある連中は、鉄道沿線の比較的豊かな土地を手に入れ、自作農家（ホームステッド）は背後地に散らばって辛うじて暮しを支える、というのが移民たちの居住の有様であった」*

* William R. Brock, *Conflict and Transformation. The United States. 1844-1877*, 1973, Penguin Books. P.434

## 七　州の成立

パースからブキャナンへ二代にわたって民主党の大統領の時代（一八五三―六一）が続いたこともあり、連邦政府から任命された官吏はネブラスカ準州初期の政界において民主党の勢力を著しく強めた。最初の州議会の勢力分布は民

主党二七に対しホィッグ一二であった。しかし、一般的にネブラスカ準州には北部出身者が多く、ブキャナン大統領の南部と奴隷制に対する親和政策への反撥が徐々に反民主党勢力をつくり出す結果を生じた。一八五九年には人民党が組織され、地域の利益代表を政界に送るキャンペーンがはじまり、翌六〇年には人民党の仮面をはずして共和党を名乗るようになった。準州段階では大統領選挙に参加できなかったが、ネブラスカに奴隷制を持ち込ませない意図から、リンカンへの強力な支持が生じた。リンカンの大統領就任と共に政権が共和党に移り、与党の後立てがなくなったことと、南北戦争時の北部特有の機運として、民主党は南部に迎合的で反連邦主義であるとして嫌われ、急激に勢力を失っていった。一八六四年リンカンの再選により、ネブラスカを州に昇格させる運動が高まった。

それに先立つ四年前、一八六〇年に州昇格の是非は人民投票にかけて否決されていた。一八六四年は、準州議会の共和党議員・民主党議員が一致して州昇格の必要を連邦議会に請願し、連邦議会はそれを了承している。しかし、州憲法制定会議の代議員選挙の段階で、州昇格によって、従来の連邦の財政援助を州が肩代りすることで増税必至とする観測が乱れ飛び、代議員の過半数が昇格に反対の為、制定会議は開会後直ちに解散し、州昇格問題は立ち消えとなった。

ネブラスカと同時に準州となったカンサスは、すでに六一年、そして、ネブラスカより人口がはるかに少いネヴァダが六四年に州に昇格して連邦に加盟し、ネブラスカに再び昇格運動が起った。一八六六年の一月準州知事ソーンダースは早期連邦加盟の有利さを準州議会で説き、州憲法制定会議は省略し、準州議会で州憲法案を通過させ、そのあと人民の同意を求める方式を提案した。この案はただちに実行に移され、連邦政府からの圧力もあって、起草委員会から特別委員会に付託されると、その日のうちに準州下院議会に上程され、四日後には上院を通過という異常な速さ

での形式的審議が行われた。その憲法草案は州議会での審議のために印刷物として配布されることすらなく、また、立法に当った議員たちも各条項をはっきり認識することもなかった。それは州昇格と安価な州政府の創成をめざして粗雑につくられた憲法であった。その年の六月、この州憲法は人民投票にかけられ、賛成三九三八対反対三八三八の僅かな差で承認を得た。この憲法は白人の成人男子にのみ選挙権を認めていたため、共和党が多数を占める連邦議会で修正を迫られ、結局、インデアン非納税者を徴き、人種差別なく基本的権利が永久に保障されるという連邦議会の決議事項を加えることを条件に六七年二月九日承認された。三月一日、民主党員の大統領ジョンソンは、もともとこの修正に反対であっただけに、ネブラスカの連邦加盟証書に不承不承、署名し、こうして、ネブラスカはアメリカ合衆国の第三七番目の州となったのであった。

## あとがき

ネブラスカのこれ以後の歴史は、次第に辺境としての様相が合衆国全体の内部的拡充に繰り込まれてゆく歴史である。八〇年代に大量の移民を受け入れ、州の人口が百万を突破するころにはホームステッダーのための自由地も殆んどなくなり、その意味でのフロンティアは消滅しようとしていた。九〇年代、ネブラスカ出身でアメリカ西部の民衆の声望を担って、マッキンレーと大統領選を争った政治家W・J・ブライアンと、そのポピュリスト運動は、ネブラスカの人々が「人民のための政治」という民主主義の原理をはっきりと主張し「鍍金時代（ギルディッド・エイジ）」の風潮の中に、次第に建国の精神から遠ざかってゆくアメリカの国政に反省を求めるまでに成長したことを示している。

ネブラスカには今日も建国の気風が残っている。アメリカ合衆国の建国は二〇〇年前であったのに比べ、ネブラスカの「建国」は一〇〇年前なのである。

《参考文献》 本文中に註をほどこしたものを除く。

James C. Olson, *History of Nebraska*, Univ. of Nebraska Press, Lincoln, 1966.

*Economic Atlas of Nebraska*, Edited by Richard E. Lonsdale, Project Director: Merlin P. Lawson, University of Nebraska, 1977

*Agricultural Atlas of Nebraska*, Edited dy James H. Williams and Doug Murfield, Project Director: Merlin P. Lawson, Univ. of Nebraska Press, 1977

*A Pictorial History of Nebraska*, Compiled by Bruce H. Nicoll, Revised by Gilbert M. Sauery, Univ. of Nebrarka Press, 1975

（付記――筆者はロータリー財団の「研究グループ交換」計画の一員として、一九七八年五月から六月末までネブラスカを視察した。本稿はその成果の一部である。財団および関係各位に感謝したい。）